

世界人権宣言 (抜粋)

【前文】

人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎であるので… (以下略)

【第一条】

すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

【第二条】

1 すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。(2以下略)

「……人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」世界人権宣言、第一条の文言である。

ここで述べられていることが達成できれば、どれだけ世の中が明るくなることだろう。

近い将来、私たちが社会の担い手となる。差別や偏見を憎み、それを断固として許さないという強い思いを、自分の中に、そして社会全体に育てていきたい。



- 差別や偏見のない社会の実現のための課題や、これまで学んだこと、考えたこと、話し合ったことなどをまとめてみよう。

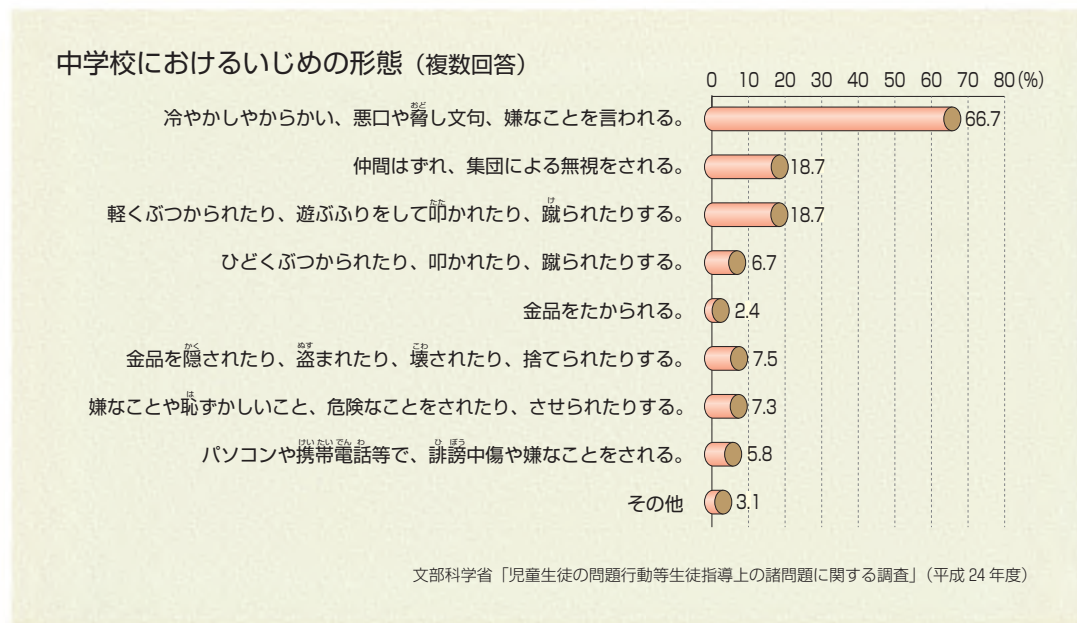
「人権の世紀」と言われる二十一世紀に入って既に十年以上が過ぎた。
正義を重んじ、公正、公平で差別や偏見のない社会を目指して、社会全体で様々な取組が行われている。
しかし、現実には、依然として、差別や偏見を受け、苦しんでいる人たちがいる。こうした差別や偏見に対し、社会を構成する私たち一人一人が断固として立ち向かわなくてはならない。
私たちの学校でも起こりうる「いじめ」も、正義に反する卑怯な行為である。
私たちの力で、いじめや差別のない社会を実現するために、どうしていけばよいただろうか。



(3) 正義を重んじ公正・公平な社会を

いじめをなくそう

友達に嫌なことを言ったり、無視してしまったりしたことはないだろうか。
 友達がいじめを受けているとき、
 知らない振りをしたり、
 いじめている人に注意ができなかったり、
 いじめられている仲間から相談を受けても
 何もできなかったりしたことはないだろうか。

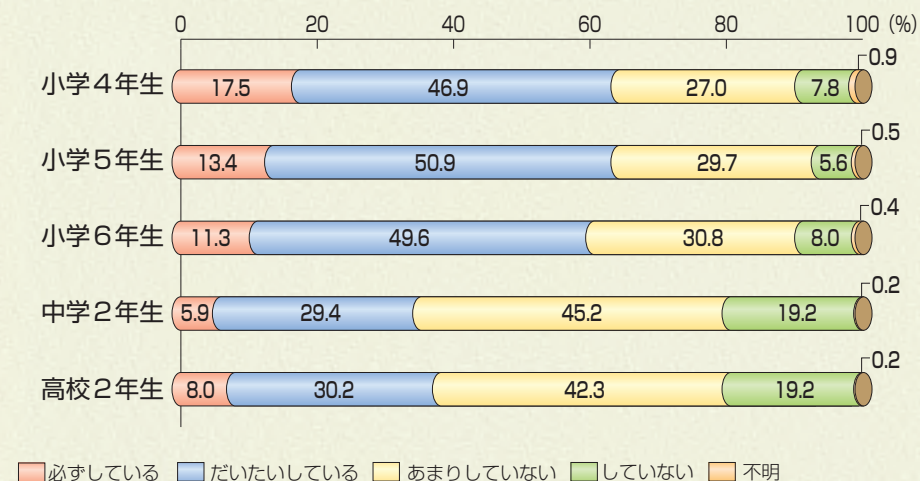


●いじめを解決するために一人一人に何ができるか、友達と話し合ってみよう。

正義感

「友達が悪いことをしていたら、やめさせること」

■あなたはどのくらいしていますか。



●悪いことをやめさせることがなかなかできないのは、なぜだろう。これまでの生活を振り返り、考えたことや話し合ったことをまとめてみよう。

message

メッセージ

大きな社会問題ともなっているいじめ。その防止や解決に向けて、中学生自身が立ち上がり、力を合わせ、主体的に取り組む例も増えてきています。

これはそうした取組の一つとして宣言されたものです。

いじめ撲滅宣言

すべての生徒は、“楽しい学校生活を送る”権利を持っています。

“いじめ”は、この権利を奪うものです。

いじめを受けた人のみならず、

いじめを行った人や周囲で見ていた人にも、

心に癒えることのない傷が残るのです。

いじめは、絶対に犯してはならない大きな過ちです。

人間は本来、優しい心を持っています。

人を思いやり、愛し、慈しむ心があるのです。

その優しさを表す勇気こそ、私達は持つべきなのです。

東京都内の全ての中学校から、全ての生徒の責任として、

あらゆるいじめをなくし、

互いに支えあい、誰もが楽しいと思える学校を作るために、

私達はここに次のことを宣言します。

一、どんな理由があっても“いじめ”は絶対にしません。

一、いじめを見つけたら、自分たちに出来ることを考え、行動します。

一、一人ひとりが互いの個性を認め合い、思いやりの心を持って、

中学校生活を送ります。

■東京都中学校生徒会長サミット
平成19年12月22日

column

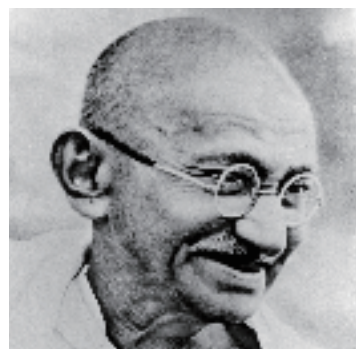
人物探訪

ガンディーは、非暴力、不服従を貫き、インド独立運動を指導した人物です。彼は自叙伝で次のような少年時代の体験を語っています。十五歳のとき、ガンディーは兄の純金の腕輪から金を少し削り取って売ってしまいます。兄の借金を返すためでしたが、盗みをしたことでガンディーの心は深く傷付きました。二度と盗みをしては決心し、父に打ち明けようと思えます。しかし、臆病だったガンディーには、口に出す勇氣がありませんでした。ガンディーは手紙を書き、父に罰を与えてくれるように頼みます。手紙を読み終えた父の目から、涙が両ほおを伝わってこぼれ落ちました。手紙を引き裂き、何も言わず悲しむそのときの父の姿をガンディーは終生忘れることはありませんでした。

人種差別との闘いは、一八九三年の南アフリカでの出来事から始まります。イギリスに留学し、弁護士の資格を取ったガンディーは、インド人の経営する会社に雇われ南アフリカに渡ります。ヨーロッパ式の服装をしていたガンディーでしたが、マリッツバーグ駅で「一生で、一番創造的な体験」をすることになります。一等車の切符を購入し乗車していましたが、人種差別に遭い、低い等級の車両に移るよう命じられたのです。移動を拒んだガンディーは警官に降ろされ、一晩駅のプラットホームで過ごしました。この体験が、ガンディーの出発点になりました。

この後、ガンディーは、人種差別との闘いを始めます。また、差別と貧困に苦しむ人々を救うために、伝染病が流行したときにはスラムに行き看護もしました。インドに帰国してからは、身分制度の最下層に置かれ、長く苦しんできた人々の地位向上のために力を尽くし、さらには非暴力、不服従の考え方の下、インドのイギリスからの独立運動の先頭に立ったのでした。

ガンディーは言います。「全ての人の目から、あらゆる涙を拭い去ることが私の願いである。」「私の人生こそが、私のメッセージである。」と。



全ての人の目から、
あらゆる涙を拭い去ることが
私の願いである。

ガンディー

●インド出身。弁護士、政治指導者。非暴力・不服従の方針を掲げ、イギリスの植民地とされていたインドの独立運動を指導した。●その思想は、米国でアフリカ系アメリカ人の公民権運動を指導したキング牧師にも影響を与えたと言われる。



若き日のガンディー

ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi) 1869~1948

一人一人が輝く^{かがや}集団づくり

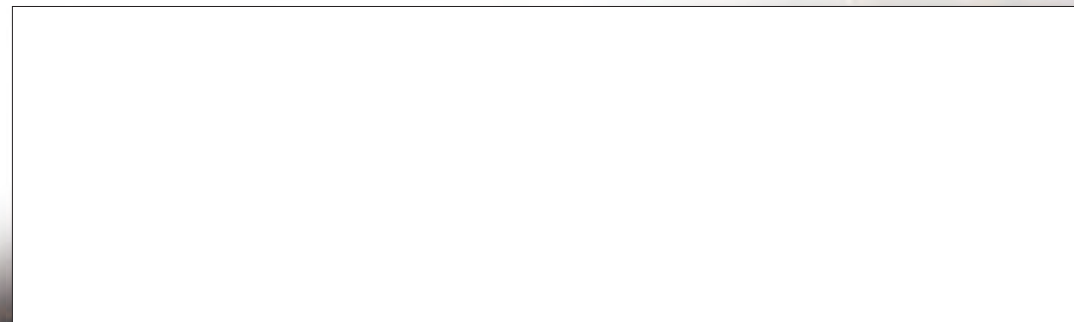
オーケストラには、^{げんがっき}弦楽器、^{かがや}管楽器や^{せんりつ}打楽器の独特の音色や、^{せんりつ}旋律の重なり、ピアノからフォルティッシモまでの音量のダイナミックな変化など、合奏ならではの魅力がある。

しかし、オーケストラで美しい曲を奏^{かな}でるためには、音量のバランス、テンポ、タイミング……、どれか一つ、誰か一人が、少しでもずれると調和がとれない。

各楽器を担当する一人一人、そして指揮者も、各自が担^{にな}う役割をしっかりと果たすことで、聴く人の心に響^{ひび}く音楽が生まれる。

私たちが所属する様々な集団においても、その目的と意義を理解し、自分の役割を自覚して責任を果たしているか、自分自身を振り返って考えてみたい。

● 集団として目標を達成するために、大切なことは何かを考えてみよう。



人間は社会で生きていくために、何らかの集団の一員になっている。自分の意志で所属することもあれば、学級のように、決められた集団に所属することもある。

どんな集団でも、目標を達成したり、そこでの生活を向上させたりしていくためには、構成する一人一人が協力し合い、役割と責任を果たすことが必要となる。

集団の中でも互いに尊重し合い、その目標を着実に実現し、他の集団からも尊敬される、そんな集団をつくっていくためには、どうしていけばよいのだろうか。

(4) 役割と責任を自覚し集団生活の向上を

- これまでの学校生活や日常生活を振り返って、集団の一員であることについて、良かったこと、また、苦勞したことを書いてみよう。

良かったこと
苦勞したこと

- 自分の所属する集団をより良い集団にしていくために、これからやってみたいことを書いてみよう。

--

集団の中の役割と責任

集団や社会に所属することは、様々な役割を果たす中で、自分の長所を伸ばし、苦勞や努力を重ねて自分を成長させることのできる、格好の機会である。



- 自分が所属している集団の中で、どのような役割や責任を果たしているか振り返ってみよう。

所属している集団	自分の果たしている役割

saying

この人のひと言

自己形成がある程度まで進んだら、
比較的大きな集団に加わり、
他人のために生き、
我が身のことを忘れるほど、
これが自分の義務だと感じた活動に身をていするのが望ましい。
人間は、そうやって初めて自分自身を知ることができる。

ゲーテ

■ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ
(1749~1832)

ドイツの詩人、劇作家、小説家。『若きウェルテルの悩み』『ファウスト』など。

人間の器は、その人間が進んで引き受ける責任の重さによって
測ることができる。

エマーソン

■ラルフ・ワルド・エマーソン (1803~1882)
米国の思想家、詩人。

人間は、自分の置かれた、その中で
最善を尽くすほかないでしょう。

小津安二郎

■おづ やすじろう (1903~1963)
映画監督。『東京物語』『晩春』など。

●あなたの見付けた言葉、考えたこと。

column

はやぶさプロジェクト

平成二十二年(二〇一〇)年六月十三日、地球を出発してから七年、約六十億キロメートルを旅した「はやぶさ」から放たれたカプセルが地球に着陸しました。「はやぶさ」の目的は、小惑星「イトカワ」に到着し、サンプルを採取し、地球に持ち帰ること。世界初の挑戦でした。プロジェクトが始まったのは平成八(一九九六)年。宇宙科学研究所(現宇宙航空研究開発機構)の川口淳一郎教授を中心に、軌道計算、通信、力学、宇宙科学などの専門家が様々な所属先から集められました。全てが初めてのことでだけに、時には学生もアイデアを出し合うところからの出発でした。二度の打ち上げの延期などを経て、平成十五(二〇〇三)年五月、「はやぶさ」は打ち上げられます。その後も順調にはいきません。姿勢制御装置の故障という深刻なトラブル。イトカワに到着後二回目のタッチダウンの失敗。しかし、最後のチャンスで「はやぶさ」が人類史上初めて小惑星のサンプル採取に取り組んだ様子は全世界に中継されました。ところが数時間後には、今度は燃料が

漏れ出すトラブルが発生。サンプル採取が失敗だった可能性が高いことも明らかになり、プロジェクトメンバーは記者会見の対応に追われます。さらに、「はやぶさ」からの通信も途絶えてしまいました。それでも、幾多の試練を乗り越えて、「はやぶさ」は地球に帰ってきました。帰還の日、カプセルを切り離れた後、大気圏に入り「はやぶさ」は燃え尽き、夜空に消えました。カプセルからは、採取した粒子が確認されました。川口教授は言います。「あのとき、『もう無理なんじゃないか』と弱気になる自分がい었지만、決して弱音は吐きませんでした。メンバー全員が『はやぶさのゴールはイトカワではなく、地球だ』と認識を共有し、最後までゆらぎもなかったと思います。すべてのエンジニアの技術と経験、絶対にあきらめないという気持ち、そして我々の期待と願いに応え、運用している人間が驚かされるほどの頑張りを見せた『はやぶさ』、そこに奇跡が加わり、壮大な旅を終えることができましたと思います。」

●宇宙科学研究所が打ち上げた小惑星探査機プロジェクト(MUSES-C)。平成8(1996)年プロジェクトが開始し、平成15(2003)年打ち上げに成功、小惑星「イトカワ」のサンプルを世界で初めて採取し、平成22(2010)年カプセルが帰還。●同研究所の川口淳一郎教授がプロジェクトマネージャーを務めた。



© JAXA

「はやぶさ」

はやぶさプロジェクト

働くことの実感

自分が働いたと感じられるのはどんなときだろう。

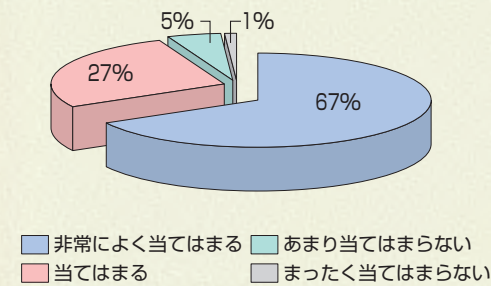
勉強をしたときだろうか。

部活動に打ち込んだときだろうか。

誰かの役に立ったと感じたときではないだろうか。

■ 職場体験活動の成果

有意義な体験になったか



- 職場体験は、とても充実して、実^{じゅうじつ}にためになりました。今回学んだことを生かし、これからの生活に生かしていきたいです。
- 挨拶^{あいさつ}は、仕事をする上で一番大切だと思いました。
- 働く大人（家族）たちに感謝する気持ちを強く感じた。
- きつい仕事を乗り切ったときこそ、達成感が大きいことを感じた。
- 自分の将来なりたい職業が見つかった。

平成22年度杉並区中学校職場体験学習実施後生徒アンケート

働くことの楽しさ、難しさ



職業に就き、
日々働き続けることには、
どんな楽しさや
難しさがあるのだろうか。

- これまで自分が経験したことや、実際に働いている人へのインタビューなどから、働くことの楽しさ、難しさを考えてみよう。

私たちの社会には、様々な仕事があり、一人一人の勤労や奉仕によって成り立っている。

働くことは、自分の夢を実現したり、収入を得て

大切な家族の生活を維持したりすることだけでなく、誰か人のために役立ち、地域や日本、世界を発展させることにもつながっている。

自分は将来、どんな仕事に就いてどのように働くのだろうか。

働くことの意味について考えていきたい。



(5) 勤労や奉仕を通して社会に貢献する

社会との関わり

あなたが働いたと感じるとき、それは、どこかで誰かの役に立っている。仕事を通じて、社会と関わり、人々の生活の向上に貢献することができる。



● 働くことを通じて、社会にどのように貢献していきたいか考えてみよう。

働くことの意義

将来、私たちは社会に出て、職業に就く。今、中学生の私たちにできることは、職場体験活動やボランティア活動などを通して働くことの意義を考え、将来に向かってしっかりと準備することだと思う。



● 職場体験活動やボランティア活動で取り組んだことを振り返り、働くことの意義について考えたことを書いてみよう。

saying

この人のひと言

研究だけをやっていただけでは駄目だ。
それをどうやって世の中に役立てるかを考えよ。

北里柴三郎

■きたさとしばさぶろう (1853~1931)
医学者、細菌学者。

我々が死ぬまでには
此世の中を少しなりとも善くして死にたいではありませんか。
何か一つ事業を成し遂げて
できるならば我々の生まれた時よりも
此日本を少しなりとも善くして 逝きたいではありませんか。

内村鑑三

■うちむら かんぞう (1861~1930)
キリスト教文学者、思想家。『後世への最大遺物』
『代表的日本人』など。

人はどんな場合にいても 常に楽しい心をもって
その仕事をする事ができれば
すなわちその人はまことの幸福な人といえる。

国木田独歩

■くにきだ ひとり (1871~1908)
小説家。『武蔵野』など。

●あなたの見つけた言葉、考えたこと。

message

メッセージ

マラソンなどで視覚障害者ランナーのために伴走する人の存在を知っているだろうか。鈴木邦雄さんは、約三十年前会社勤めの傍ら、視覚障害者ランナーのマラソン伴走という「仕事」を始めた。無報酬でしかも交通費も宿泊費も自分でもたなければならぬボランティアの仕事だ。

伴走という仕事の見返りは何か、という質問に鈴木さんは「相手の方が走れた感動」だと、即答する。「相手の方が喜んでくれることが、僕の喜び」なのだという。

伴走者とランナーとは短いロープでつながれている。あくまでも主役はランナーであり、伴走者は歌舞伎でいう黒子だ。鈴木さんは「ランナーに対する気配り、気遣い、思いやり、そして基本は信頼関係」と言う。苦しくてもそれを乗り越えた達成感、充実感が格別だそうで、それをランナーと共有することが鈴木さんの仕事なのである。

決してランナーには無理をさせない。「やめたい」と言われたら「がんばれ」などとは言わず「やめましょう」と応じる。折返し地点に達すると鈴木さんはランナーに「楽しみが半分になっちゃいましたね。」「楽しみは残り半分ですよ。」「声をかけるぞうだ。」

鈴木さんは、以前従事していた電気会社の仕事で鈴木さんとその家族の生活を支えてきた。さらに今は、全国のどこへでも出掛け、視覚障害者ランナーを支える仕事を続けている。



仕事の見返りは
相手の方が走れた感動です。

鈴木邦雄

●山梨県出身。視覚障害者ランナーの伴走者。昭和59(1984)年、会社に勤めながら、マラソンと伴走にほぼ同時に取り組み始め、現在まで続けている。●NPO法人日本盲人マラソン協会(JBMA)の常務理事を務め、全国で伴走教室を展開、平成23(2011)年にはランナーズ賞を受賞した。

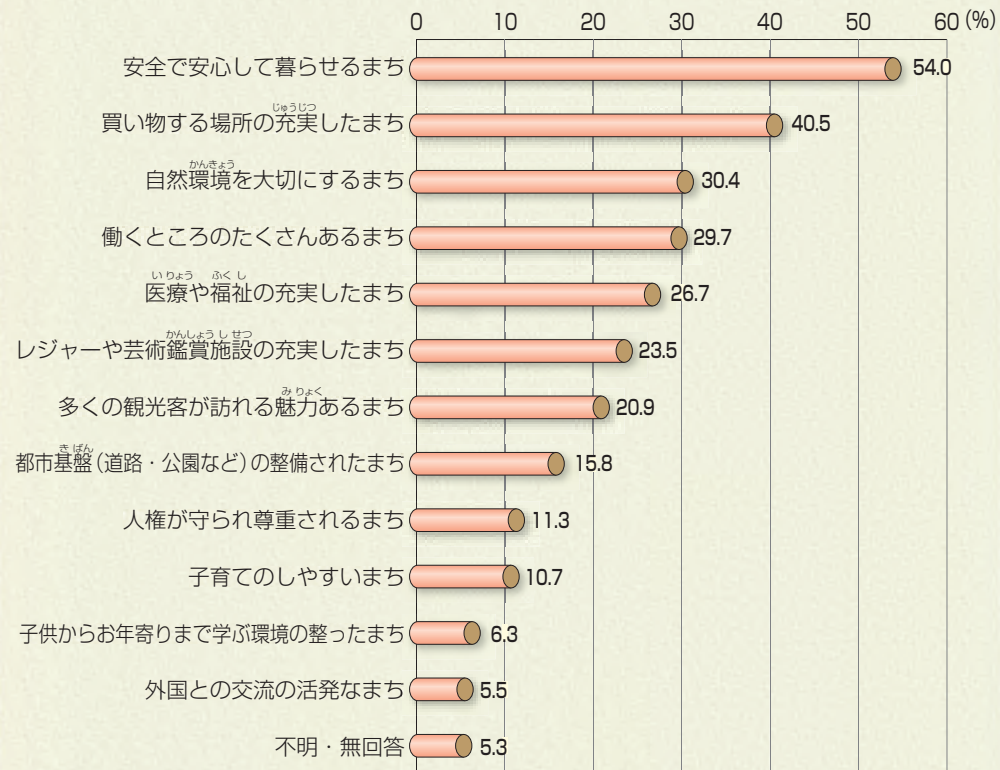


伴走する鈴木邦雄さん(中央)

鈴木邦雄 (すずきくにお) 1945~

■ 中学生アンケート

●あなたが大人になった時、どんなまちになっていたら良いと思うか（複数回答）



●もしあなたが市長だったらどんな「まちづくり」を進めたいか（自由意見）

- いじめがなく子供たちにとって住みやすい所にしたいと思います。
- ラムサール条約登録湿地である穴道湖や中海を地域住民みんなで「守り大切にす」という意識をもてるような取組を行いたいです。
- ショッピングモールなど若者が楽しめる場所を増やし松江城や武家屋敷などの昔の町並みを生かし観光客も楽しめる町にする。
- 障害者用の駐車場を増やしたり、道路や歩道の段差をなくしたり、老人ホームを増やすなど、福祉の充実した町にしたいです。
- 働く所をたくさんつくってワークシェアリングも取り入れる。

島根県松江市調査（平成23年）



社会

に目を向け、
と関わり、
を良くする。



職場体験活動



英語観光ガイドボランティア



避難所での炊き出し



地域の文化継承

家族や家庭の役割

家族は私が生まれてからずっと、私の命を守り、深い愛情を注いでくれた。そして家庭は、つか疲れた自分を癒いやしてくれる、かけがえのない安らぎの場所。



●家族や家庭について、これまで学んだことや考えたことなどをまとめてみよう。



(6) 家族の一員としての自覚を

家族は、最も身近な共同体である。
一緒に生活をし、
食事や身の回りの世話をしてくれ、
私の心と体を育ててくれた。

私も、

少しずつではあるが、家事を手伝ったり、
家族の一員としての役割を担ったりするようになり、
家庭の仕事の大変さや、
家族の有り難さが分かってきた。

一方で、家族に反抗したり、
一人になりたいと思ったり、
自立したいと思ったりすることも増えてきた。

将来、私も家族を支える立場になる。
私を育ててくれた家族に感謝し、
自分が築きたい家庭を思い描きながら、
人生を歩んでいきたい。



命の長いつながり

かけがえのない命を授かったことを忘れずに、命の長いつながりに感謝しながら、生きていきたい。

私の命は父母から授かり、父母の命は祖父母から授かり、過去からずっと引き継がれてきた命のつながりの中で、私たちは生きている。



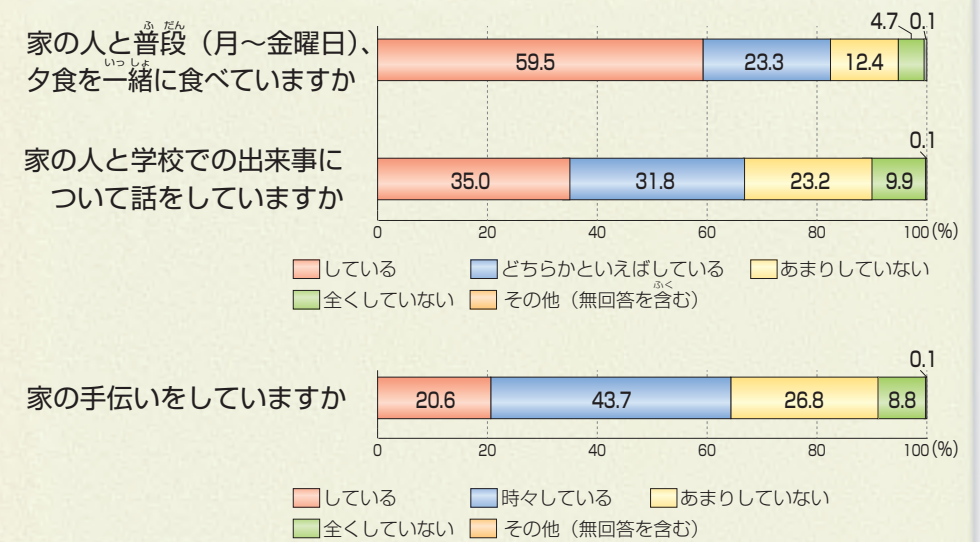
いつか新しい家庭を築く



● 将来、自分が築きたい家庭をイメージしてみよう。

家庭でのコミュニケーション

中学3年生の状況



文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査」

● 家族との出来事や語らいで印象に残ったことを書き留めておこう。

column

誰かのために

僕が看取った患者さんに、スキルス胃がんに罹った女性の方がいました。余命三か月と診断され、彼女は諏訪中央病院の緩和ケア病棟にやってきました。

ある日、病室のベランダでお茶を飲みながら話していると、彼女がこう言ったんです。「先生、助からないのはもう分かっています。だけど、少しでも長生きをさせてください」彼女はその時、四十二歳ですからね。そりゃそうだろうなと思いつつも返事に困って、黙ってお茶を飲んでいました。すると彼女が、「子供がいる。子供の卒業式まで生きたい。卒業式を母親として見てあげたい」と言うんです。九月のことでした。彼女はあと三か月、十二月くらいまでしか生きられない。でも私は春まで生きて子供の卒業式を見てあげたい。子供のためにという思いが何かを変えたんだと思います。

奇跡は起きました。春まで生きて、卒業式に出席できた。こうしたことは科学的にも立証されていて、例えば希望を持って生きている人のほうが、がんと闘ってくれるナチュラルキラー細胞が活性化するという研究も発表されています。おそらく彼女の場合も、希望が体の中にある見えない三つのシステム、内分泌、自律神経、免疫を活性化させたのではないかと思います。

さらに不思議なことが起きました。彼女には二人のお子さんがいます。上の子が高校三年で、下の子が高校二年。せめて上の子の卒業式までは生かしてあげたいと僕たちは思っていました。でも彼女は、余命三か月と言われてから、一年八か月も生きて、二人のお子さんの卒業式を見てあげることができたんです。そして、一か月ほどして亡くなりました。

*
彼女が亡くなった後、娘さんが僕

のところへやってきて、びっくりするような話をしてくれました。僕たち医師は、子供のために生きたいと言っている彼女の気持ちを大事にしようと思ひ、彼女の体調が少しよくなるかと外出許可を出していました。

「母は家に帰ってくるたびに、私たちにお弁当を作ってくれました」と娘さんは言いました。彼女が最後の最後に家へ帰った時、もうその時は立つこともできない状態です。病院の皆が引き留めたんだけど、どうしても行きたい。そこで僕は、「じゃあ家に布団を敷いて、家の空気だけ吸ったら戻っていらっしやい」と言って送り出しました。ところがその日、彼女は家で台所に立ちました。立てるはずのない者が最後の力を振り絞ってお弁当を作るんですよ。

その時のことを娘さんはこのように話してくれました。「お母さんが最後に作ってくれたお弁当はおむすびでした。そのおむすびを持って、

学校に行きました。久しぶりのお弁当が嬉しくて、嬉しくて。昼の時間になって、お弁当を広げて食べようと思ったら、切なくて、切なくて、なかなか手に取ることができませんでした」

お母さんの人生は四十年ちょっと、とても短い命でした。でも、命は長さじゃないんですね。お母さんはお母さんなりに精いっぱい、必死に生きて、大切なことを子供たちにちゃんとバトンタッチした。人間は「誰かのために」と思った時に、希望が生まれてくるし、その希望を持つことによって免疫力が高まり、生きる力が湧いてくるのではないかと思います。

（『致知』2012年7月号）

●あなたの感じたこと、考えたこと。

●東京都出身。医師。諏訪中央病院名誉院長。経営危機の状況にあった諏訪中央病院の医師として勤務、昭和63(1988)年に院長になる。●著書「がんばらない」では、延命だけを目的にした治療を批判的にとらえ、患者とその家族に接する豊富な経験や豊かな生と死についての考えが透き通っている。●ベラルーシ共和国(当時ソ連)のチェルノブイリ原子力発電所事故の被爆患者の治療などの支援活動に取り組んでいる。

鎌田 實 (かまたみのる) 1948～



「お兄ちゃん、おばあちゃんのことだけど、この頃かなり物忘れが激しくなったと思わない。僕に、何度も同じことを聞くんだよ。」

「うん。今までのおばあちゃんとは別人のように見えるよ。いつも自分の眼鏡や財布を探しているし、自分が思い違いをしているのに、自分のせいではないと我を張るようになった。おばあちゃんのことでは、お母さん、かなり参っているみたいだよ。」

弟の隆とそんな会話を交わした翌朝の出来事であった。

「お母さん、僕の数学の問題集、どこかで見なかった。」

「さあ、見かけなかったけど。」

「おかしいな。おととい、この部屋で勉強した後、確かにテレビの上に置いたのになあ。」

学校へ出かける時間が迫っていたので、僕は段々いらいらして、祖母に言った。

「おばあちゃん、また、どこかへ片付けてしまったんじゃないの。」

「私は、何もしていませんよ。」

そう答えながらも、祖母は部屋のあちこちを探していた。



母も隆も問題集を探し始めた。しばらくして、隆が隣の部屋から誇らしげに問題集を持ってきた。

「あったよ、あったよ。押入の新聞入れに、昨日の新聞と一緒に入っていたよ。」

「やっぱり、おばあちゃんのせいじゃないか。」

「どうして、いつも私のせいにするの。」

祖母は、責任が自分に押し付けられたので、さも、不満そうに答えた。

「そうよ、何でもおばあちゃんのせいにするのはよくないわ。」

母が、僕をたしなめるように言った。僕は、むっとして声を荒げて言い返した。

「何言ってるんだよ。昨日、この部屋の掃除をしたのはおばあちゃんじゃないか。新聞と一緒に問題集も押入に片付けたんだらう。もつと考えてくれよな。」

「そうだよ。お兄ちゃんの言うとおりだよ。この前、僕の帽子がなくなったのも、おばあちゃんのせいだったじゃないか。」

「しっかりしてよ、おばあちゃん。近頃、だいぶぼけてるよ。僕ら迷惑してるんだ。今も隆が問題集を見付けなかったら、遅刻してしまうところじゃないか。」

いつも被害にあっている僕と隆は、一斉に祖母を非難した。祖母は、悲しそうな顔をして、僕と隆を玄関まで見送った。





学校から帰ると、祖母は小さな机に向かって何かを書き込んでいた。僕には、そのときの祖母の寂しそうな姿が、なぜかいつまでも目に焼き付いて離れなかった。

祖母は、若い頃夫を病気で亡くした。その後、女手一つで四人の息子を育て上げる傍ら、民生委員や婦人会の係を引き受けるなど地域の活動にも積極的に関わってきた。そんなしつかり者の祖母の物忘れが目立つようになったのは、六十五歳を過ぎたこころ、二年のことである。祖母は、自分は決して物忘れなどしていないと言い張り、家族との間で衝突が絶えなくなった。それでも若い頃の記憶だけはしっかりとっており、思い出話を何度も僕たちに聞かせてくれた。このときばかりは、自分が子供に返ったように目を輝かせて話をした。両親が共働きであったことから、僕たち兄弟は幼い頃から祖母に身の回りの世話をしてもらっており、今でも何かと祖母に頼ることが多かった。

ある日、部活動が終わって、僕は友達と話しながら学校を出た。途中の薬局の前で、友達の一人が突然指差した。

「おい、見ろよ。あのばあさん、ちょっとおかしいんじゃないか。」

「本当だ。何だよ、あの変てこりんな格好は。」

指差す方を見ると、それは、季節外れの服装にエプロンをかけ、

5

10

15

20



古くて大きな買い物籠を持った祖母の姿であった。確かに友達が言うとおり、その姿は何となくみすばらしく異様であった。僕は、慌てて祖母から目を離すと辺りを見回した。道路の向かい側で、二人の主婦が笑いながら立ち話をしていた。僕には、二人が祖母のうわさ話をしているように見えた。

祖母は、擦れ違ふとき、ほほ笑みながら何かを話し掛けた。

しかし、僕は友達に気付かれないように、知らん顔をして通り過ぎた。友達と別れた後、僕は急いで家に帰り、祖母の帰りを待った。

「ただいま。」

祖母の声を聞くと同時に、僕は玄関へ飛び出した。祖母は、大きな買い物籠を腕にぶら下げて、汗を拭きながら入ってきた。

「ああ、暑かった。さつき途中で会った二人は……。」

「おばあちゃん。何だよ、その変な格好は。何のためにふらふら外を出歩いているんだよ。」

僕は、問い詰めるような厳しい口調で祖母の話の話を遮った。

「何をそんなに怒っているの。買い物に行ってきたことぐらい見れば分かるでしょ。私が行かなかったら誰がするの。」

「そんなことを言っているんじゃない。みんながおばあちゃんのことを笑ってるよ。かっこ悪いじゃないか。」

「そうして、みんなをばかにしなさい。一体どこがおかしいって言うの。誰だって年を取ればしわもできれば白髪頭に

20

15

10

5

もなってしまうものよ。」

祖母の言葉は、怒りと悲しみで震えていた。

「そうじゃないんだ。大体こんな古ぼけた買い物籠を持って歩かないでくれよ。」

僕は、腹立ちまぎれに祖母の手から買い物籠をひたたくった。

「どうしたの、大きな声を出して。おばあちゃん、僕が頼んだ物ちゃんと買ってきてくれた。」

「はい、はい。買ってきましたよ。」

隆は、買い物籠を僕から受け取ると、さっそく中身を点検し始めた。

「おばあちゃん、ばんそうこうと軍手が入ってないよ。」

「そんなの書いてあったかなあ。えーと、ちょっと待ってね。」

祖母は、あちこちのポケットに手を突っ込みながら一枚の紙切れを探し出した。見ると、それは隆が明日からの宿泊学習のために祖母に頼んだ買い物リストであった。買い忘れないように、祖母の手で何度も鉛筆でチェックされていた。

「やっぱり、ばんそうこうも軍手も、書いてありませんよ。」

「それとは別に、今朝、買っておいでくれるように頼んだらろう。」

「そんなこと、私は聞いていませんよ。絶対聞いていません。」

「あのね、おばあちゃん。……。」

隆は、今にもかみつくような顔で祖母をにらんだ。

「もうやめろよ。おばあちゃんは忘れてしまったんだから。」

「何だよ。お兄ちゃんだって、さっきまで、おばあちゃんに大きな声を出していたくせに。」

僕は、不服そうな隆を誘って買い物に出かけた。道すがら、隆は何度も祖母の文句を言った。

その晩、祖母が休んでから、僕は今日の出来事を父に話し、何とかならないかと訴えた。父は、僕

と隆に、先日、祖母を病院に連れて行ったときの話を話し出した。

「お前たちが言うように、おばあちゃんの記憶は相当弱くなっている。」

しかし、お医者さんの話では、残念ながら現在の医学では治すことはできないんだそうだ。これからもっとひどくなっていくこと

も考えておかなければならないよ。おばあちゃんは、おばあちゃんなりに一生懸命やってくれているんだからみんなで温かく見

守ってあげることが大切だと思うよ。今までのように、何でもお

ばあちゃんに任せっきりにしないで、自分でできることぐらいは

自分でするようにしないといけないね。」

「それは僕たちもよく分かってるよ。だけど……。」

これまでの祖母のことを考えると、僕はそれ以上何も言えなくなっ

た。

その後も、祖母はじっとしていることなく家の内外の掃除や片付け

に動き回った。そして、物がなくなる回数はますます多くなった。

ある日、友達からの電話を受けた祖母が、伝言を忘れたため、僕

は友達との約束を破ってしまった。父に話した後怒らないようにし

ていた僕も、このときばかりは激しく祖母をののしった。

それから一週間余り過ぎたある日、探し物をしていた僕は引き出

しの中の一冊の手あかに汚れたノートを見付けた。何だろうと開け

てみると……

それは、祖母が少し震えた筆致で、日頃感じたことなどを日記風



● 感じたこと、考えたこと。

いたたまれなくなって、外に出た。
庭の片隅でかがみこんで草取りをしている祖母の姿が目に入った。夕焼けの光の中で、祖母の背中は幾分小さくなったように見えた。僕は、黙って祖母と並んで草取りを始めた。
「おばあちゃん、きれいになったね。」
祖母は、にっこりとうなずいた。

5

に書きつづったものであった。見てはいけないと思いがら、つい引き込まれてしまった。最初のページは、物忘れが目立ち始めた二年ほど前の日付になっていた。そこには、自分でも記憶がどうにもならないものかしさや、これから先どうなるのかという不安などが、切々と書き込まれていた。普段の活動的な祖母の姿からは想像できないものであった。しかし、そのような苦悩の中にも、家族と共に幸せな日々を過ごせることへの感謝の気持ちが行間にあふれていた。

『おむつを取り替えていた孫が、今では立派な中学生になりました。孫が成長した分だけ、私は年をとりました。記憶も段々弱くなってしまい、今朝も孫にしかられてしまいました。自分では気付いていないけれど、他にも迷惑をかけているのだろうか。自分では一生懸命やっているつもりなのに……。あと十年、いや、せめてあと五年、何とか孫たちの面倒を見なければ。まだまだ老け込むわけにはいかないぞ。しっかりしろ。しっかりしろ。ばあさんや。』

それから先は、ページを繰ることに少しづつ字が乱れてきて、判読もできなくなってしまった。最後の空白のページに、ぼつんとにじんだインクの跡を見たとき、僕はもう

20

15

10

5

